

「谷根千・駒込 光源寺隊」

## いわき市の四ツ倉高校避難所 炊き出し 第5便

H23年5月18日 日帰りのご報告 島田富士子

**参加者** 駒込蓬菜町会長の大畑清心さん、原通夫さん、黒沼力男さん。青年部の池田孝二郎さん、婦人部の藤関芳江さんと井川錦子さん、小山美弥子さんの計7名。案内役の島田富士子。かねてより日帰りでの参加を希望していた宮地美華子さん（古書ほうろう・千駄木）を誘いました。総勢9人でした。



お世話係（四ツ倉の避難者）の「ありがとう」の笑顔に、グリーンの上着がトレードマークの蓬菜町会が「よくがんばってるね」と。

中華なべ大1個、洗剤25K、トマト6箱、タバコ8カートン、お弁当箱25個、雑誌1箱、男女下着2箱、乾電池40個などなど。

**炊き出し** 110人分+市職員とボランティア

他20人分=計130人分



盛り付け直前に再加熱。町会長が焼き肉と野菜炒め130人分を一気に盛り付け、温かいうちにどうぞ！



洗剤、雑誌、トマト、洗い桶、タバコなど、支援物資を届けました。」

☆

**前夜6：00** 蓮華堂にて野菜の下ごしらえ。みそを溶きいたりいろいろ。光源寺隊4名、蓬萊町会5名で。荷物を車に積む。東京新聞が写真取材。

**5月18日**

**5：00** 集合・**5：30** 光源寺を出発

**7：00** 友部で休憩 高速道路がでこぼこしてうねり、荷台の鍋が激しく騒ぐ。

**8：30** 予定にはなかったが、早く着いたので「勿来市民会館避難所」（36名・うち子ども3名）へ。市の職員がロビーで衣類の箱をあけ、座敷を避難所にしていく方々に自由に取りにくるように呼びかけてくださる。男性用の下着がすぐになくなり、残り少なくなったところ職員の方が「学校に行っている子ども3人にこのTシャツが合うわ。もらっとこうよ」と。小学校中学年の男女3人がいるとのことでした。町会から楽しそうな風船セットをお渡し。

前回の8日の光源寺隊に現地から下着を要請されてたが、買い求める時間がなかった。蓮華堂の物を取りあえず持参。

普段は市民の宴会にも利用される和室の大広間を2つぶち抜いていて、腰までの高さのダンボールの屏風がそこここに立ち、いい感じ。大畑町会長も「この屏風を入手しておこう」と乗り気。

**8：50** 市民会館の隣の「勿来体育館避難所」（54名・子ども0）へ。すでに半分の方が出て、広々とした体育館は殺風景。調子の良くないお年寄りが数名、横になっていて人気がない。一同「広くて寒いね。向こうの市民会館に行けた人は幸せね。」「避難所は選べないのかしら」と。体育館の内部にへこみのような場所が

あり、テーブルとパイプイスとで、15名ぐらいが飲食できる場所があった。大畑会長が「こういう誰でもちょっと話せる場所が必要だね」と採用の雰囲気。残りの下着を箱ごと置いて引き上げる。

**9：20** 勿来の海岸を見ようと車を走らせたが、通行止めなどが多く行き着けなかった。

**10：30** 「平体育館避難所」（142名・うち子供6名）へ。いわき市の中心街の立派な体育館だが、ロビーがない。受付室の中に職員が詰めていて、ドア一つ内側の体育館は、背丈ほどのダンボールで迷路のように仕切られ、入り組み、上にダンボールでふたを載せてこもる方も多く、声をかける雰囲気ではなかった。芸術文化センター「アリオス」に避難して、5月5日にそこから34人が移り、この仕切りがあったためか人数が増えるに当たって大もめとなったところ。煮炊きができない、単身者が多い、しかもその日は善意の炊出しがなかったことから険悪な雰囲気となり、四ツ倉高校のボランティアの本柳さんと平工業高校のボランティアの加藤さん（文京区社協）が奔走して、食事を提供した経緯があった。「う～ん、最初の避難所作りが大切なんだなあ」と大畑会長はしきり。

持参したトマトを4箱お届けすると、「こういうものは助かります」と市の職員。洗うだけで、切らないで食べられる野菜が避難所に好まれる。

帰り際にその方が、「4月23日に支援物資の中にダンボールのついたてが来たので使いました。覗かないと体調が分からないので困るんです。覗かないでといわれることもあり、困っています」とのこと。

**11：00** すぐ隣の「鮮場」（やっちゃば）という市場で一同買い物。小野崎社長に前回のかわいいの煮物（1切れ150円）のお礼を言い伺う。不在だったが、お店の方にお伝えできた。道を隔てた体育館ではパックの御飯と菓子パンを食べる150名ほどの方がいて、こちら側はお金さえあればなんでもそろそろマーケットだった。

**11：30** 「平工業高校避難所」（約60名）へ。4月22日に車中泊した、なつかしの駐車場を抜けて厨房に直行。ボランティアの仕切り役の加藤良彦さんは今日は東京行きと伺っている。いきなり「文京区の方ですね、私は今日で帰りますが、それはだれも知らないんです。あさって帰るといふ加藤さんに伝えといてください」「明日から料理はおかせします」と。全否定して、現状を伺う。隣にはあらゆる野菜が山積みの倉庫。光源寺からの白菜もしおれていた。「どさつ、どさつと、キャベツ2箱とかにんじん3箱とか送ってくるけど、使い切れないんだよ。毎日少しずつ送ってほしい。悪くなったものから使っていく身になってほしい」と。大畑会長と島田で「ここはトマトはやめましょう」となった。

避難所となっている体育館では、自治労の長崎県の方が「レトルトの野菜と肉団子の煮物」「パックの御飯」を日赤の大なべで温めてバットに盛り付けている。朝の

残りのみそ汁が温めてあり、至れり尽くせり。自由に各自でよそって運び、手馴れた様子。

前回同様、整然と整理されたカウンターにコーヒーやふりかけや、自由に使える物が豊富に置かれている。遊び道具、郵便受け、テレビ、健康相談などが、ゆつたりとコーナーに点在。BGMが流れる。前回同様、支援物資の山。未開封の佃煮、缶詰、ドリンク、お菓子、ラーメンなどなど。ボランティアの加藤さんに「避難所に届いた物資は避難所の方の共有の所有物。他の避難所にあげることはできない。私の裁量で30個とか、1箱とかは、まあできるかな」と電話で伺ったことがある。他と融通できるといいのに。

**12:30** すし八で昼食 なかなかおいしいお店

**13:30** いわき市議の酒井光一郎さんから電話。向かいの議員会館に富士子だけ会いに行く。久が浜の津波と火事の片付けに四ツ倉の本柳さんと浜の若者が奔走しているので、助力してほしいと伝える。浜の気質と人脈の難しさをしきりに強調、市議の派閥を気にされていた。

**14:00** 近くの「満蔵寺」へご挨拶。今後、光源寺隊を泊めていただけることに。時間が押したので、草野小学校避難所は省略。

**15:20** 久が浜へ。すさまじい津波のあと、火事で町の半分が焼けた。トンネルと坂で北と南を区切られ、一つの入り江と栈橋がある典型的な浜の風景。奥に深い町は、浜からの猫道でくねくねと繋がる。火事の焼け跡の柱だけ倒してあり、ほかは手付かずの状態。小さなクレーン車が2台、柱を一本ずつ移動していた。一同言葉なし。津波に引かれたのか、海のほうに向けて真っさかさまの家。すべてのケースや瓦礫が店の奥に流されて詰まったままの商店。庭に焼け焦げた松ノ木。

四ツ倉高校の避難所を基地として、久が浜の片付けのボランティアの受け入れをこれから始める計画がある。その炊き出しを手伝ってほしいと現地の要請が富士子にあったが、「とてもそこまではできない」とお断りした経緯がある。17日の朝日新聞には『久が浜の婦人部が元気に』の記事があった。こういう方々がいるんだ、よかった、でもどうなっているんだろう。

**16:20** 四ツ倉高校避難所着（110名・うち子ども10名・中高生6名）先遣隊の石塚理子さんが手を大きく振って、迎えてくださる。先遣隊の5人によって、古くなりそうな有り合わせの野菜で、里芋と白菜のみそ汁をすでに130人分作ってあった。助かった！ 蓬萊町会のグリーンのジャンパーを着て、ほうずき市の「ほおずき手ぬぐい」が9人のそろいの姿。

**17:00** ほおずき市の焼きそばの大きな鉄板で、手際よく焼肉を。隣の小さな鉄板で野菜炒めを。キャベツを刻む人、きゅうりもみを作る人、すべて気持ちよく同時進行。一同かなり必死。

いつもの石川さん（避難者）がご飯を炊いている。長机をL字にして130食を、

石塚さんのはっきりした掛け声の下に盛り付け、武道場のお年寄りチームに30食を手渡す。

**18:00** すべての配食が終わり、さて自分たちも食事、と思ったらご飯がない。避難所の方々はいまだ、炊き出しの人のことは頭にないらしい。「ごちそうさま」は聞けるけど「いただきま〜す」は一度も聞いていない。まあ、それでいいのだけれど。

**19:00** 暗闇の中で、鉄板や、鍋や、バットを洗い、車に積む。

**19:30** 体育館に入り、マイクでご挨拶。町会長の「こんばんは」の声に、皆さんが全員で「こんばんは」となり、私はびっくり。1ヶ月前は「みんなでする」はなにもなかった。目も合わなかった。拍手でお礼をしていただき、各人が近くの方と簡単な話をさせていただいて退出。荷物を積んでいると、なんと体育館から大音量で演歌の歌声が。

武道場はしんとして、みなさんひっそり。こちらは煮炊きも別で、野菜を独自にストック。食材と、炊き出しからの食事は人数分で分けていると伺う。体力的に自立できないお年寄りを多く集めた避難所は、行政がよほど人と物資を投入しないと成り立たない。お年寄りはお互いに穏やかだが、毎日の食事や洗濯が難しい。簡易トイレが少し遠いのも大変。大畑町会長「う〜ん、これは課題だね」

**20:00** 四ツ倉インターから常磐道で順調に帰路に。速度メーターはいつも130キロ。

**22:20** 光源寺着。荷物を降ろして解散。





久の浜。小さな町全体が見渡す限りこんな感じ。被害のない家は一軒もなく、津波の後に火災し、見る影見もない。片付けは全く手付かずでした。

## 支援の難しさについて

今回は災害支援の難しさをいくつも体験しました。

現在いわき市には約1500人の方が避難所にいます。自分で避難所を出るためのつてがない方、無職の方も多く、人との縁が薄かった方々の方々のようです。福島県は、もともとは小さな浜を中心に栄えたため、それぞれが狭い地域で暮らしてきたところです。気仙沼などのように町全体が一様に被害にあったわけではありません。細く長い海岸線の海に関係した仕事の方の多くが津波に合い、避難所しています。

●**いわき市**は仮設住宅を桑折に作り、原発避難地域を優先していく方針です。他の地域の方は、レオパレスなどの空き家、市営住宅の「幹旋住宅」に個別に相談しながら入ります。住宅補助金を4人までが月6万円、9人までが月9万円とのことです。地域の関係はばらばらになってしまいました。継続的な支援も難しいです。

●**また、土地の気風**というものがあり、ちょっとした言葉遣いがとても難しいです。特に四ツ倉、久が浜は難しいと、四ツ倉高校のボランティアの本柳さんの言です。排他的で、気に入らない人に「出ていってくれ」「二度と来るな」がよく使われる激しい土地とのことです。四ツ倉にしっかりとボランティアが根付かなかった理由の一つに、この気質と言葉があるとのことです。今回の炊き出しで、ちょっとしたやり取りがありました。みそ汁の使い捨て容器が小さくて、大量に残りました。先遣隊の1人の方が「100円ショップに売っているから、買っておいたら」と配食を手伝っている避難者に話しました。その言葉で「島田さん、お世話になっていますが、二度と来ないようにお願いします、すごい言い争いが起きますから」と、帰り際に避難所の方にいわれました。相手の言

葉で傷がついたとしても、そのことを言葉で話そうとはせず、背中を向けられてしまいます。外から来る支援者は相当な人格者でないともちません。100円の重み、何も無い方の痛みに、いつもはらはらしながらの支援です。

●**四ツ倉支所**の方と、私は何度も電話連絡するようになりました。向こうからも「お世話になります」とお礼の電話があります。その度に「おかずのお弁当だけでも配食してください、気仙沼でも石巻でもしていますよ」といい続けていました。支援物資のバックのご飯とインスタントのみそ汁でも、おかずがあればいいのです。

ついに、朗報！ 29日からお弁当が避難所に配られるとのことでした。よかった。それで、炊き出しの受け入れは28日までと電話をいただいていたのが、腑に落ちました。四ツ倉への炊き出しは、18日の第5便で終了です。皆様、お疲れ様でした。

●**光源寺隊の炊き出し**は、原発の影響でなかなか配食がなかった四ツ倉高校避難所を劇的に向上させました。四ツ倉の避難所では初めての魚料理を届け、初めて家庭料理のメニューを届け、150人が自炊できる鍋や台所用具を千成り市の「万福食堂」から届け、初めての野菜と卵を届けました。その後も、それぞれの伝手で、子ども用お弁当箱やら、それに今回のプロ用フライパンまで。実に、実質的な日常支援ができました。

●光源寺隊では「**家庭でいつも食べている食事**」をテーマに炊き出しをしました。少しコストがかかりましたが、おかげさまで救援金で乗り切れました。魚の煮付け、根菜の煮物、キャベツもみ、焼肉と野菜炒め。いつも、さっぱりした具のみそ汁。

言葉は少ないのですが、喜んで、安心して召し上がっておられました。このことから一つの教訓を得ました。どんなにお腹がすいた方にも、災害支援だからと提供されるカレー、どんぶり物、トン汁の繰り返しは体が受け付けなくなる。ていねいに作られた和食を切望されたことです。子供向けには、ハンバーグ、焼肉、とんかつ、ソーセージという別のメニューが要望されました。どの避難所にも子どもは少なく、大人と分けて考えたほうがよさそうでした。日本人の日常の食事は、世界的に見るととても高度です。救援の際にも味の取り合わせや風味のある食事を切望されました。

●**炊き出しに行った人**は「谷根千・駒込 光源寺隊」から、四ツ倉高校避難所へ、20人です。加えて、現地で合流して下さったいわきの方が6人です。食べ物を届けるばかりでなく、他の避難所の状況をいくつも見て、自分たちの支援を多面的に見て報告をしてくださいました。きっと、人生の厚みとなって経験が役立つと確信しています。

●**5月23日**、地元の方々より「光源寺隊の仲のよさ、仕事の手際よさを地元の婦人会で見習わせていただきたい」というご連絡をいただきました。四ツ倉の区長さんからのお願いでもあると、本柳さんの言です。日ごろあまり付き合いのよくない地元の人間関係とのことですが、外部の元気な人がお手伝いして支えると、とてもいい風通しが生まれます。これは『千成り市』でも経験済みです。久が浜の片付けの方々への炊き出しです。四ツ倉より3K、原発寄りです。50歳以上の方々で応援にいきたいです。改めてお願いのお知らせをさせていただきます。



ほとんど毎日150人分のご飯を1人で炊き続けた石川さん(右)と、手伝う由美さん(中央)。1・5升の釜が2台あり3回転させる。どうしてこんなに物資が届かなかったんだろう。

第5便 以上